

# 島本町文化財調査報告書

第44集

広瀬遺跡発掘調査報告

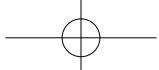
第  
44  
集

令和5年2月

令和5年2月

島本町教育委員会

島本町教育委員会

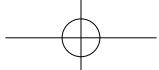


島本町文化財調査報告書

第  
44  
集

令和5年2月

島本町教育委員会



## 序

島本町では、現在 26 か所の埋蔵文化財包蔵地が周知されており、これまでに、本町教育委員会や大阪府教育委員会などにより数々の発掘調査が行われてきました。その中で、本書で報告する広瀬遺跡は、本町広瀬地区に広がる遺跡で、試掘調査や立会を含めて、本町内でもっとも多くの調査を行ってきた遺跡です。

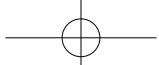
今回の発掘調査は、宅地造成計画を契機に実施したもので、平安時代から鎌倉時代にかけての遺構・遺物を確認し、本町の歴史を読み解く上での資料を新たに得ることができました。そして、この調査を実施するにあたっては、工事事業者をはじめ、工事関係者、近隣住民の皆様のご理解とご協力をいただき、それにより調査を成し得ることができました。ここで、改めて関係者の皆様に感謝申し上げます。また、今後とも本町の発掘調査をはじめとする文化財保護の取り組みに、町民の皆様のご理解とご協力賜れますようお願い申し上げます。

令和 5 年 2 月

島本町教育委員会  
教育長 中村 りか

## 例　　言

1. 本書は、令和元年度宅地造成工事に伴い実施した広瀬遺跡発掘調査(H S 19-1 善法寺)の報告書である。
2. 調査は、島本町教育委員会事務局教育こども部生涯学習課木村友紀・賀納章雄を担当者とし、現地での発掘調査は令和元年 5 月 15 日から 6 月 6 日にかけて実施し、その後、島本町立歴史文化資料館で整理及び報告書作成作業を行い、本書の刊行をもって完了した。
3. 調査及び整理作業にあたっては、下記の調査員及び調査補助員の参加を得た。  
【調査員】坂根 瞬、原 由美子 【調査補助員】布施 英子、眞子 悠乃、小出 匠子
4. 本書の執筆は賀納が行い、作成編集は賀納・坂根が行った。
5. 本調査に関わる資料の保管と活用及び本調査によって作成された資料などの管理は、島本町教育委員会が行っている。
6. 本書に用いた標高は、東京湾平均海水面 (T.P. [Tokyo Peil]) を基準とした数値である。  
方位は、国土座標第Ⅳ系における座標北である。
7. 土層断面図の土色は、小山正恵・竹原秀夫編『新版標準土色帖』第 12 版を使用した。
8. 出土遺物の時期相については、小森俊寛 (2005)『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房、中世土器研究会編 (1995)『概説中世の土器・陶磁器』真陽社を参考とした。



## 目 次

第1章 位置と環境	1
第2章 調査の経過	3
第3章 調査の成果	4
(1) 土層序	4
(2) 遺構	4
(3) 遺物	8
第4章 まとめ	15

## 挿図目次

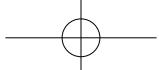
第1図 島本町内遺跡分布図	2
第2図 調査地位置図	3
第3図 調査区配置図	3
第4図 調査区北壁土層断面図	5
第5図 遺構平面図	7
第6図 遺構断面図①	9
第7図 遺構断面図②	10
第8図 遺物実測図①	13
第9図 遺物実測図②	14

## 付 表

遺物観察表	16・17
報告書抄録	巻末

## 図版目次

図版1 調査地近景・調査区北壁・遺構検出状況	図版2 遺構検出状況・S K 1 土器群
図版3 遺構検出状況・P 8 土師器出土状況	図版4 出土遺物



## 第1章 位置と環境

島本町は、大阪府の北東端部、京都府との境に位置し、その東側は北から京都府京都市、長岡市、大山崎町、八幡市と、西側は大阪府高槻市、南端は大阪府枚方市と隣接する。町域は、概ね南北約7km、東西約4kmの範囲に南北に細長く広がり、面積は約16.81km<sup>2</sup>となる。

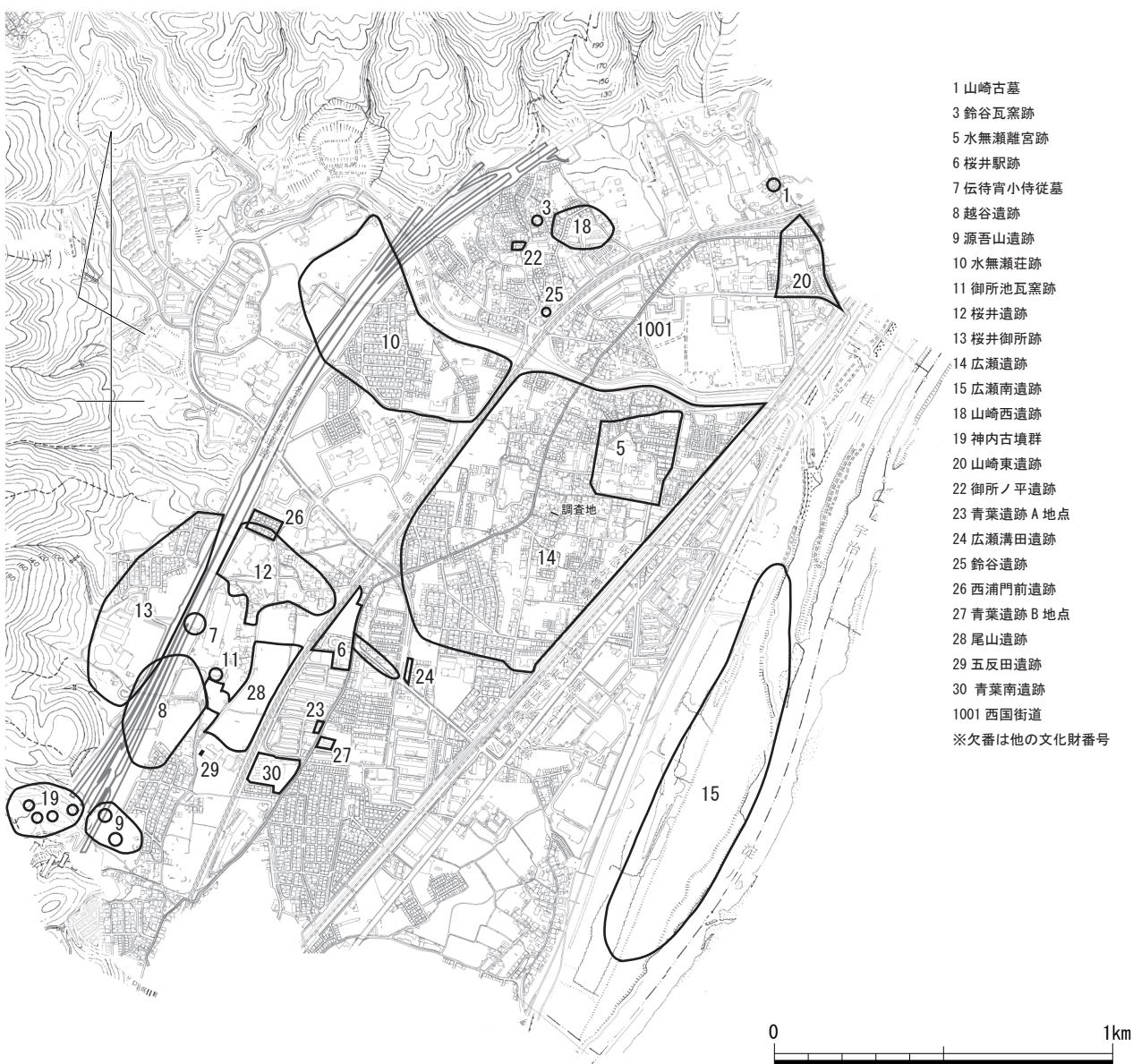
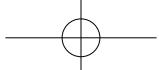
その地形は、町域の西から北側が山地・丘陵地、東から南側は平野部となるが、山地・丘陵地が町域の約7割を占めている。島本町史によると、山地部は北摂山地の東端に当たり、中でも京都盆地と接して南北走する山地部を西山山塊とよび、西山山塊のうち町域の北側にはポンポン山地が連なり、その南東側に一段低い天王山山地がある。これらの山地部は主に丹波層群によって構成され、砂岩、頁岩、チャート等の岩石からなる。そして、天王山山地の南側には狭い範囲ながら山崎・桜井丘陵とよばれる丘陵地がみられ、主に大阪層群によって構成されている。

また、平野部は、9～13m程度の標高で広がり、主に河川堆積物によって構成され、淀川低地とよばれる。本町南東の山崎狭隘においては、京都盆地から流れ込む桂川、宇治川、木津川の三川が合流し、淀川となって大阪平野を西流するが、本町には、淀川のほか、山地・丘陵地を源とする水無瀬川、善峰川、滝谷川、鈴谷川、越谷川、八幡川、西谷川等の河川があり、水無瀬川を除いては、山地・丘陵部から短く平野部に流れ出るという小規模なものが多い。淀川低地は、主に淀川からの供給物によって構成されるが、水無瀬川等の他の河川からの堆積物によっても構成され、小河川付近には扇状地地形が広がる。また、水無瀬川沿いには、河岸段丘地形がみられる箇所もある。

島本町は、古代の国郡制においては摂津国島上郡に属するが、東は山城国に接し、その地勢から島本は交通の要衝となっていた。南に流れる淀川は水運の重要な交通路であり、特に長岡京・平安京遷都以降はその重要性は増していく。平安時代、山崎（大山崎町域も含め）には津が整備され、また遡る奈良時代には架橋もされ、淀川を介した島本付近の地域的重要性がわかる。さらに、水運ばかりでなく、淀川と丘陵部との間に挟まれた平野部上においては、平安京と西国を結ぶ山陽道（西国街道）が通り、陸路においても重要な幹線路が貫いていた。すでに奈良時代においても、平城京と西国とを結ぶ幹線道路上に駅伝制の駅が置かれ、島本付近には大原駅が設置されたと考えられている。

本書で報告する広瀬遺跡は、縄文時代から近世にかけての複合遺跡であり、古くは縄文時代晩期の竪穴式建物跡が確認され、弥生時代、古墳時代の遺構・遺物も検出されているが、平安時代以降、確認される遺構・遺物の量は増大する。それは、長岡京・平安京遷都によって、その地勢的重要性が増していったことに関連するものと考えられるが、広瀬遺跡における西国街道沿いでの発掘調査では小石敷きの路面をもつ中世の道路状遺構が検出されている。そこでは平安時代の遺物も出土しており、その整備が古代にまで遡る可能性が指摘されている。

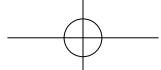
また、こうした地勢的背景もあったと考えられるが、島本には、平安時代から鎌倉時代にかけて、天皇や貴族が度々遊行に水無瀬の地を訪れている。桓武天皇や嵯峨天皇は遊獵を好み、文徳天皇の子である惟喬親王はこの地に御殿を築いたという。広瀬遺跡においては平安時代前期の建物跡



第1図 島本町内遺跡分布図(1/20,000)

群が検出されているが、これは惟喬親王の水無瀬離宮関連施設の可能性が考えられている。また、鎌倉時代には、後鳥羽上皇が正治元（1199）年に水無瀬離宮を造営している。この水無瀬離宮は建保4（1216）年の洪水で倒壊したが、翌年には丘陵上に再建されたという。広瀬遺跡では、後鳥羽上皇の水無瀬離宮に関連するものと考えられる建物跡や所用瓦が検出されており、広瀬遺跡の南西丘陵上にある西浦門前遺跡では、庭園跡と考えられる遺構が検出されている。さらに広瀬遺跡の南西平野部に位置する尾山遺跡においては、平安時代から鎌倉時代にかけての建物跡が確認されているが、ここでは庭園に付随する可能性が考えられる池泉跡が検出されている。

このように、広瀬遺跡及びその周辺では、道路状遺構や離宮等関連遺構など、平安時代以降の島本の地勢を特徴的に示すような資料が得られている。



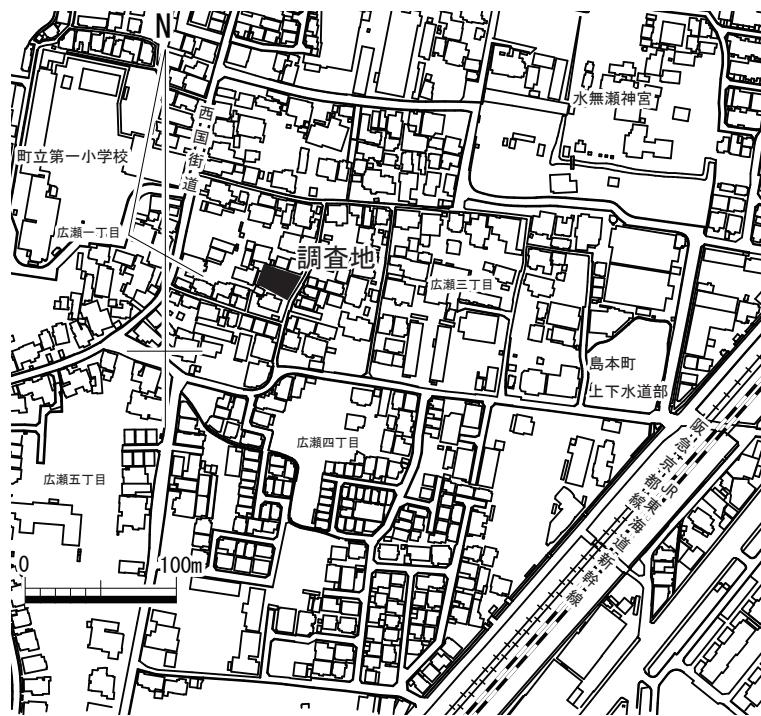
## 第2章 調査の経過

今回の発掘調査は、広瀬遺跡の包蔵地内に当たる島本町広瀬三丁目365番において宅地造成工事が計画され、平成31年2月5日付で事業者から文化財保護法に基づく埋蔵文化財発掘の届出がなされた。この届出を受け、事前に遺構・遺物包含の有無を確認することを目的に、平成31年4月17日～19日に確認調査を実施したところ、中世を中心とする遺構・遺物の包含を確認することができた。

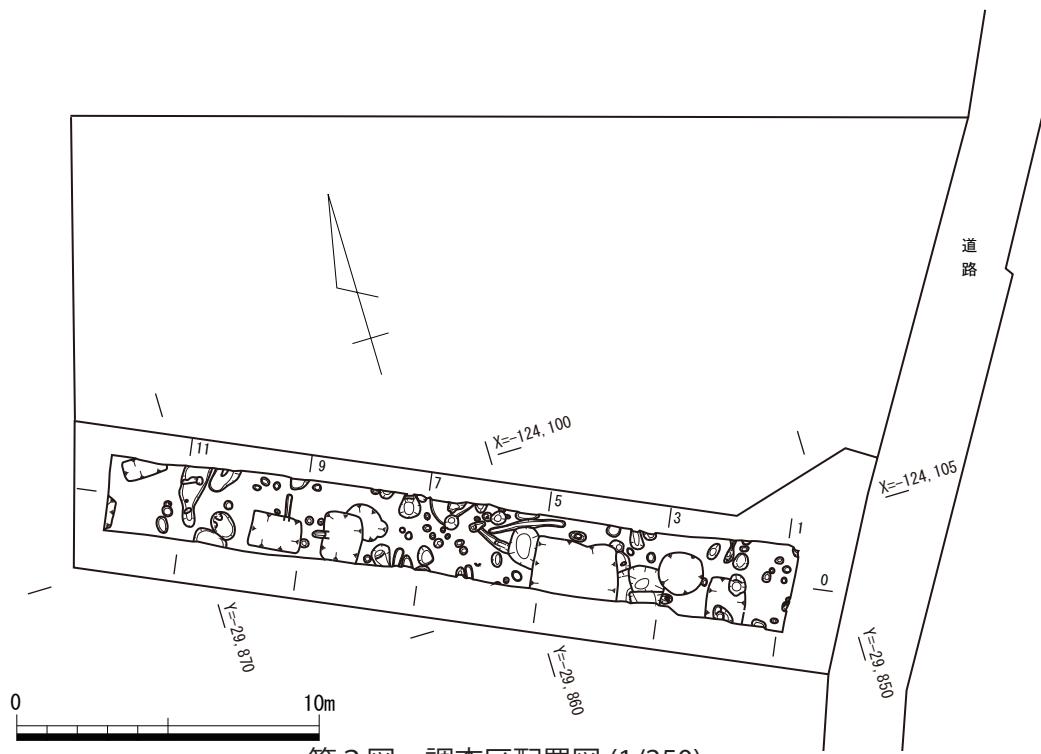
この確認調査の結果を受け、予定される工事の計画をみた場合、計画

地の中でも道路敷設の予定箇所については発掘調査を実施することが必要と判断された。そのため、事業者との協議により、調査に要する重機及び作業員等の経費については事業者による負担とし、道路敷設予定箇所を対象に調査区（98.6m<sup>2</sup>）を設定し、発掘調査を実施することになった。

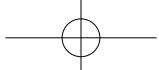
発掘調査は、令和元年5月15日～6月6日にかけて実施し、まず遺物包含層直上までの現代盛土層等の土砂を重機により除去し、その後、人力による包含層掘削、遺構検出、遺構掘削の後、写真撮影、実測作図等の記録作業を行い、現地での発掘調査を終了した。



第2図 調査地位置図(1/5,000)



第3図 調査区配置図(1/250)



## 第3章 調査の成果

### (1) 土層序

調査区内の土層序は、次のように大きく5層に分けられる。

第I層：現代盛土層である。（第4図：1層）

第II層：盛土層下に20～60cm程度の厚さで堆積する、黄灰色もしくは黄褐色系の礫混じり粘砂土を主体とする土層である。（第4図：2～8層）

第III層：礫を主体とし、そこに粘砂土が混じる土層である。断続的にみられる。（第4図：9～13層）

第IV層：黄色もしくは黄橙色の粘質土層である。部分的にみられる。（第4図：14・15層）

第V層：地山層となる浅黄色もしくは明黄褐色の粘質土層である。また、遺構面となる。（第4図：16・17層）

これら土層のうち、第II層・第III層において遺物の包含が認められたが、第II層内の遺物については中世から近世のものと考えられる遺物細片が混在しているような状況であった。このことから、第II層については、近世以降に中世以前の堆積層を取り込みながら形成された土層であると考えられる。また、第III層については、この発掘調査の前に行った範囲確認調査において中世の遺物の包含がごく少量認められた。第III層は断続的に認められたものであるが、第III層が断続的にみられるのは、上位層である第II層形成時の搅乱等の影響があるのかもしれない。

### (2) 遺構

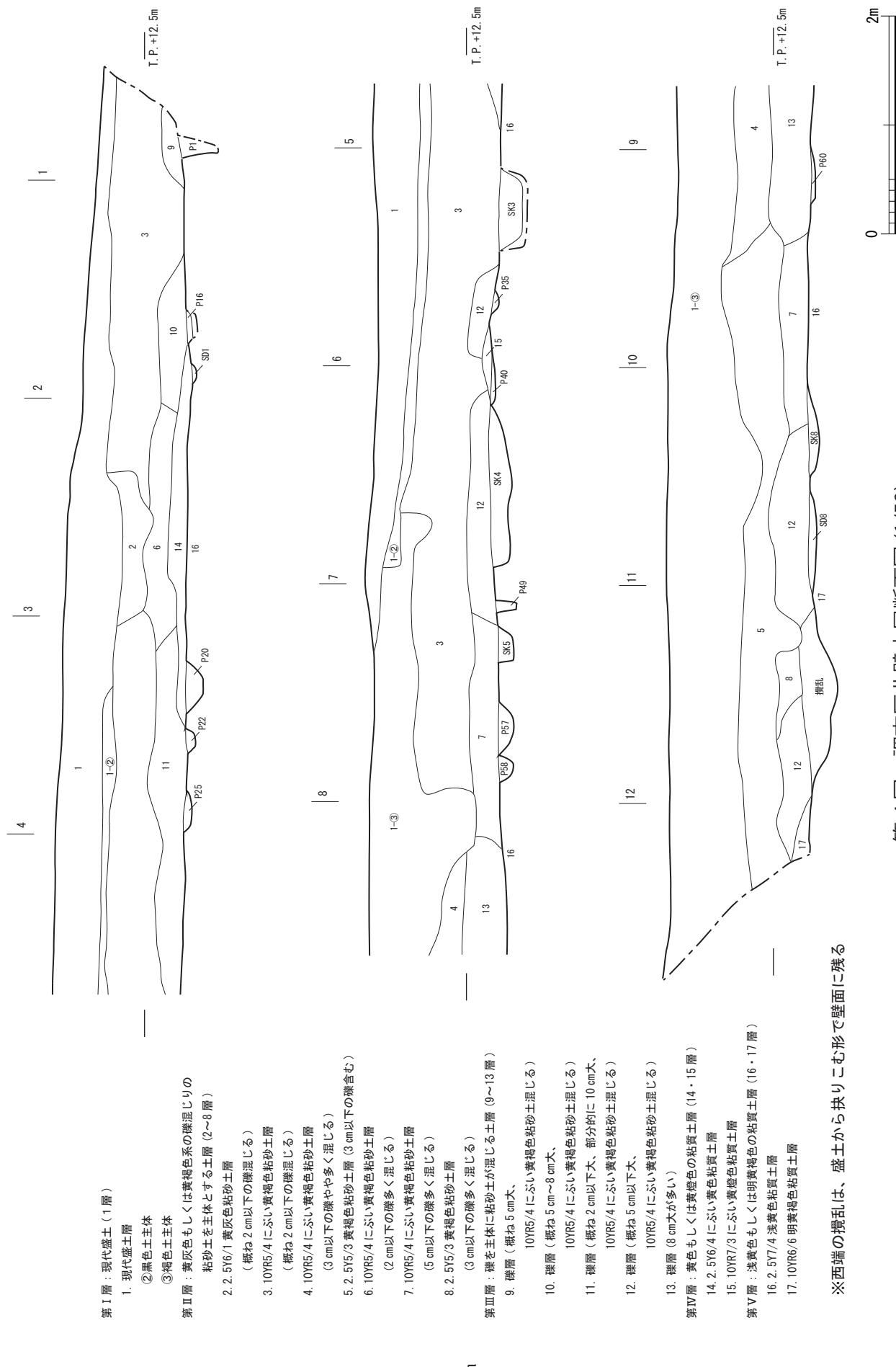
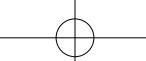
第V層上面を遺構面として、ピット（P）、土坑（SK）、溝（SD）等の遺構を検出した。ピットと土坑にはその大きさにそれほど差のないものもあるが、ピットは73基、土坑は8基、溝は7条検出することができた。

#### 【ピット】

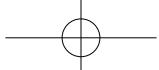
ピットについては、かなり浅く人為的な掘削ではなく単なる遺構面上の窪みではないかと考えられるものもあったが、しっかりと掘り込まれたものも確認できた。

例えば、15cm以上の深さのものは22基あったが、このうちSK4に重複する形で検出されたP72は65cmの深さを測った。P72を除けば、他のピットは30cm以下の深さとなる。今回の発掘調査では、建物跡に復元できるピットの並びは確認できなかったが、形状から柱穴と考えられるピット（P26、P37など）もあり、当調査地内に建物跡が存在する可能性は高いと考えられる。

また、P8からは、土師器ての字状口縁皿1点（44）がほぼ完形で出土した。この他、遺物を検出したピットは32基あった。その多くは土器細片が少量出土する程度であったが、半数程のピットからは時期判断の手がかりとなる遺物がみられた。こうした遺物には、平安時代の可能性が考えられるものが多かった。



第4図 調査区北壁土層断面図 (1/50)



例えば、黒色土器片（P 12・P 13・P 18・P 20・P 26・P 36・P 37・P 47）、土師器甕片や皿片（P 5・P 8・P 19・P 36・P 37・P 47）、須恵器甕片や杯片（P 19・P 33・P 36・P 37・P 67）があった。

また、P 24 内からは平安時代の緑釉陶器片が出土したが、P 24 では鎌倉時代の土師器・瓦器片が出土し、他に P 17 内からも鎌倉時代の瓦器片が出土した。

ピットの時期については、平安時代の遺物を出土したものが多いことから、平安時代のものが中心になるのではないかと考えられる。ただし、出土遺物が細片で少量であるピットも多く、P 24 のように平安時代と鎌倉時代の遺物が混在するものもあることから、時期を判断するには難しいものもある。

### 【土坑】

土坑についてみると、調査区東側で検出した S K 1 と S K 2 はかなりしっかりと掘り込まれたものであった。

S K 1 は、最深部で 70cm を測ったが、その全体形は、調査区壁にかかり、また攪乱を受けていたために明らかでないが、東西 150cm 以上 × 南北 130cm 以上の大きさを測った。S K 1 は当初、溝と重複するような形で検出したが、掘削する中で切り合い部分において地山とみられた箇所が遺構埋土であることがわかり、当初溝とした部分も一体の土坑と判断して掘削を行った。しかし、掘削を行うと、土坑内底面で概ね三段の起伏が認められた。その形状をみると、土坑と溝状のものの 3 つの遺構が重複しているようにみえ、S K 1 については複数の遺構が重複したものであった可能性が高い。

S K 1 の上層付近では土師器皿が集中して検出される箇所があった。この遺物集中部（土器群）出土の土師器皿には、10 世紀中～後半のものと考えられる字状口縁皿もあったが、他の多くは 13 世紀中～後半を中心とするものであった。さらに、土器群内には瓦器片も含まれていた。

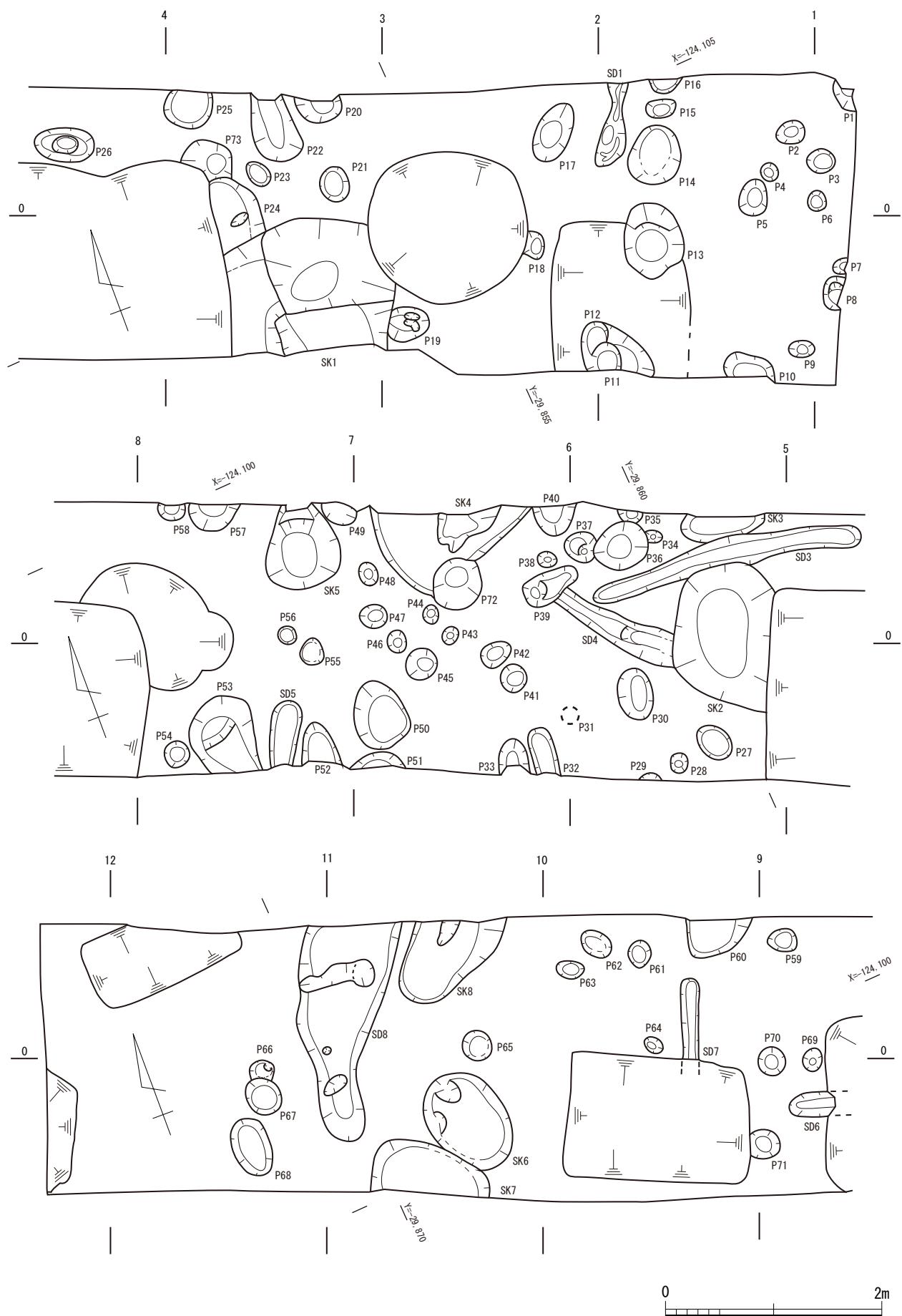
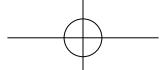
この他、S K 1 内からは、平安時代の緑釉陶器片や灰釉陶器片、黒色土器片、鎌倉時代の土師器皿片、瓦器椀片等が出土した。また瓦片や轍羽口片、土坑の最下部底面上において平安時代のものと考えられる土師器甕片が検出された。

S K 2 は、東西 80cm 以上 × 南北 130cm の大きさで、深さは 68cm を測った。緑釉陶器片や灰釉陶器片等の平安時代の遺物から、鎌倉時代の土師器皿片や瓦器椀片が出土した。中には 13 世紀代のものと考えられる瓦器ミニチュア土器三足羽釜（39）があった。

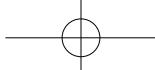
S K 3 は、検出部分で東西 80cm 以上 × 南北 28cm 以上、深さ 25cm を測ったが、土坑内からは土師器片が出土し、中に平安時代のものと考えられる口縁端部に沈線状の線が入る皿片があった。

S K 4 は、P 72 に重複される形で検出された。検出部で東西 148cm 以上 × 南北 75cm 以上を測り、底面は段を有し、掘り方上端から 10 ～ 15cm 落ち、そこからさらに 5 cm ほど下がる。土坑内からは、時期不明の土師器小片が出土した。

S K 5 は、検出部で東西 70cm × 南北 80cm 以上、深さ 40cm を測った。土坑内からは、鎌倉時



第5図 遺構平面図(1/50)



代頃のものと考えられる土師器皿片、瓦質土器片が出土した。

S K 6 は、99cm×66cmの楕円形を呈し、深さ 15cmを測った。土坑内からは、鎌倉時代のものと考えられる土師器皿片が出土した。

S K 7 は、東西 110cm以上×南北 40cm以上を測り、深さは 7 cmと浅いものであった。

S K 8 は、東西 70cm×南北 88cm以上、深さ 14cmを測った。土坑内からは、時期不明の土師器細片が出土した。

### 【溝】

溝についてみると、当初、土坑 S K 1 と重複してみられた溝が、掘削過程で S K 1 と一体のものであると判断して掘削する結果となった。これにより、検出した溝は 7 条となる（当初付番した S D 2 は欠番）。

S D 1 は、検出部で長さ 78cm、幅 10～24cmを測った。底面は凹凸が大きく、深いところで 9 cmを測った。

S D 3 は、長さ 256cm、幅 18～22cmを測った。S D 3 の埋土は地山層と見分けがつきにくく、掘削しすぎた部分もあったが、概ね深さ 12cmを測った。溝内からは、土師器片や黒色土器片が出土し、土師器片には平安時代のものと考えられる皿片があった。

S D 4 は、P 39 と S K 2 に重複される形で検出され、検出部で長さ 120cm、幅 18～30cm、深さ 12～15cmを測った。溝内からは、土師器細片が出土した。

S D 5 は、検出部で長さ 62cm、幅 20cm、深さ 4 cmを測った。

S D 6 は、確認調査時に検出されたもので、その時点で長さ 120cmを測ったが、確認調査で深掘りしたため、本調査時では長さ 40cmが残存して検出された。幅 20cm、深さ 4 cmを測った。

S D 7 は、検出部で長さ 75cm、幅 14～16cm、深さ 5 cmを測った。

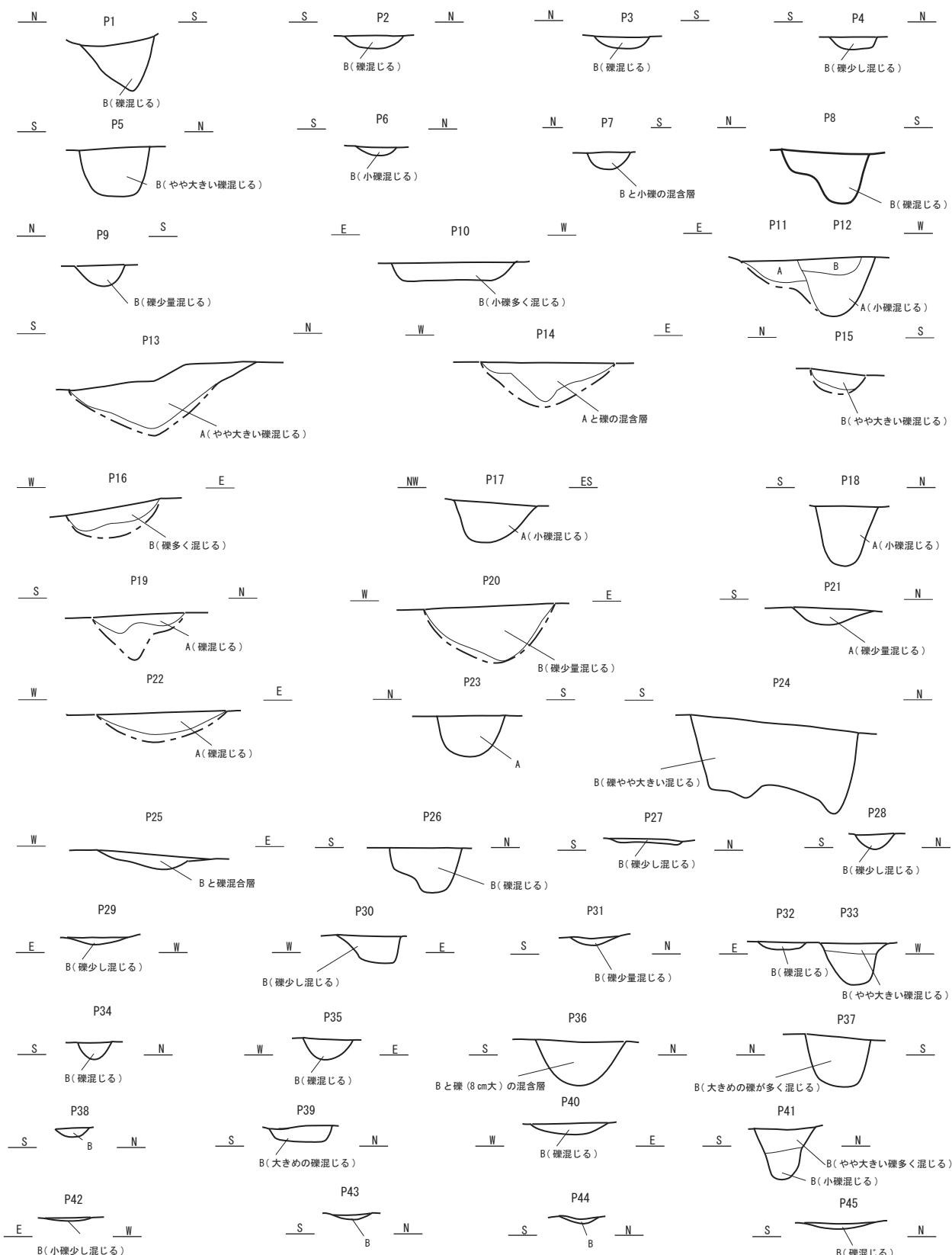
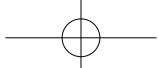
S D 8 は、検出部で 196cm、幅最大部で 90cm、深さ 6 cmを測った。

### (3) 遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は、平安時代から鎌倉時代のものが主体となり、中でも土師器が多くを占めた。土師器のほか、須恵器、黒色土器、瓦器、そして、少量ながら緑釉陶器、灰釉陶器、白磁等の高級陶磁器の出土もあった。ここでは図化することのできた遺物についてまとめる。

#### 【S K 1 土器群】

1～10 は土師器皿である。1 はての字状口縁皿である。口縁部ヨコナデ、底部内面ナデ、底部外面は指オサ工後ナデ調整される。器厚はやや薄手で、10世紀中～後半のものと考えられる。また、2～10 は 13世紀中～後半の所産と考えられるものであるが、今回の調査で検出した当該時期の土師器皿については、概ね口径が 8～9cm程度の小型のものと、12～13cm程度の中型



A. 2. 5Y5/2 暗灰黄色粘砂土

B. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘砂土

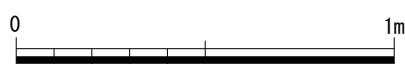
C. 2. 5Y5/1 黄灰色粘砂土

D. 2. 5Y5/3 黄褐色粘砂土

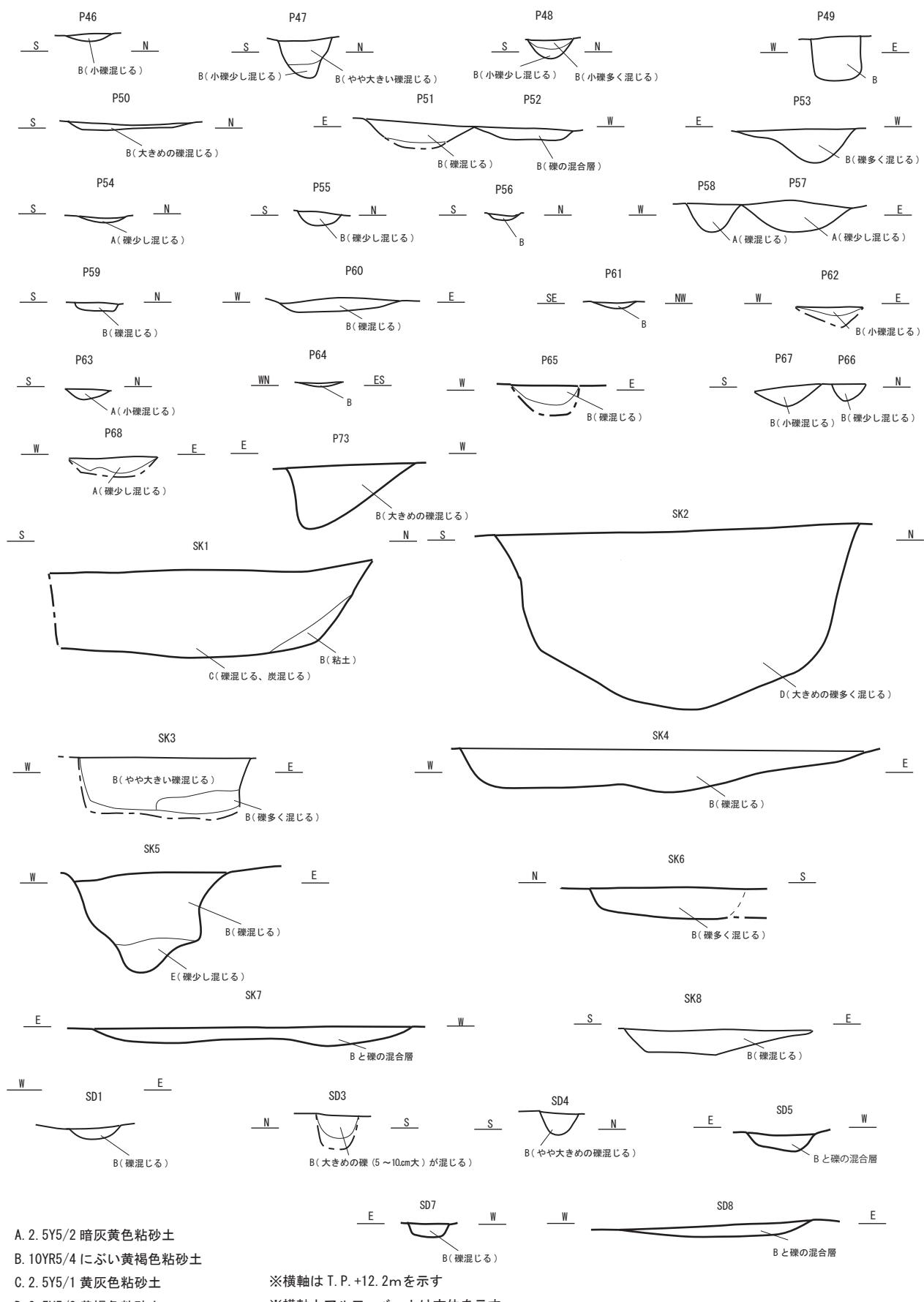
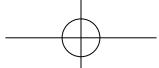
E. 2. 5YR5/1 黄灰色粘砂土

※横軸は T.P. +12.2m を示す

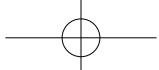
※横軸上アルファベットは方位を示す



第6図 遺構断面図① (1/20)



第7図 遺構断面図② (1/20)



のものに分けられ、2～6は口径8.2～8.8cmの小型、7～10は口径12.4～13.3cmの中型のものとなる。調整は、口縁部ヨコナデ、底部内外面をナデ調整されているが、底部外面に指頭痕を残すものもあり、中型の7～10についてはすべて指頭痕を残す。また、3については、底部外面に植物種子のものと考えられる圧痕が3か所残る。

#### 【SK1 土器群直下埋土】

土器群直下で検出した遺物で、土器群と強く関連性をもつ可能性もあり、他のSK1内出土のものと分けて取り上げたものである。

11は須恵器壺か瓶の底部である。残存部分で回転ナデ調整されている。平安時代の所産であろうと考えられる。

12は須恵器碗である。口縁部が外側へ開き、口縁部から体部については回転ナデ調整され、底部内面はナデ調整、底部外面は回転糸切り痕が残る。東播系のもので、12世紀末～13世紀初頭頃のものであろうか。

13～23は土師器皿で、13～20は口径8.4～9.1cmの小型、21～23は口径12.4～13.5cmの中型のものとなる。調整は、口縁部ヨコナデ、底部内面ナデ、底部外面は指オサエ後ナデ調整されている。13世紀中～後半のものと考えられる。

24は瓦器碗である。口縁部はヨコナデ、体部内面はやや粗いヘラミガキ、体部外面は指オサエで調整されている。退化した高台が付く。これも、土師器皿と同じく13世紀中～後半のものであろう。

#### 【SK1 出土】

土器群関係として取り上げたもの以外で、SK1内から出土した遺物である。

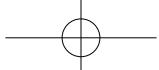
25は緑釉陶器皿である。回転ナデ調整され、貼り付け輪高台を有し、底部外面には回転糸切り痕が残る。素地は硬質に焼き上げられ、全面に施釉されている。平安時代中期のものか。

26は土師器甕である。SK1底面直上で検出したものである。残存部で、口縁部はヨコナデ、体部は内外面ともナデ調整されている。体部外面上端はヨコナデにより段を有する。平安時代後期頃のものか。

27・28は小型の土師器皿である。2点とも口縁部ヨコナデ、底部内外面はナデ調整されているが、27については底部外面に指頭痕が残る。また28については口縁部の外反が強い。27は13世紀中～後半のものと考えられるが、28については、若干時期が下るかもしれない。

29は平瓦である。凹面には布目痕が残り、凸面はヘラナデ、側面はヘラケズリで整えられている。やや軟質で、胎土は橙色に焼き上がる。時期は断定できないが、他の広瀬遺跡での出土瓦の時期相からみると、鎌倉時代の所産であろうか。

30は轍羽口である。先端部分には鉱滓等の残滓物が付着し、被熱のため、外面は黒みがかり、送風孔内面は赤化している。その時期については不明である。



## 【SK 2 出土】

31は灰釉陶器碗の底部である。残存部分で全面に薄くオリーブ灰色の釉がかかるが、内面の一部と、体部と高台の接合部に釉が厚くたまる箇所がある。

32～35は土師器皿である。32～34は小型、35は中型のものであり、いずれも口縁部ヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面は指オサエ後ナデ調整されている。13世紀中～後半頃のものと考えられる。

36～38は瓦器碗である。いずれも口縁部ヨコナデ、体部内面はやや粗いヘラミガキ、体部外面にミガキは施されず指オサエで調整され、37については指オサエ後ナデ調整されている。底部は欠損しているため、高台の状況は不明である。13世紀中～後半のものであろう。

39は瓦器のミニチュア土器三足羽釜である。口縁部から羽部はヨコナデ、体部内外面はナデ調整されているが、外面は指頭痕を残す。上記瓦器碗と同時期頃のものであろうか。

40・41は瓦である。40は丸瓦で、凸面はナデ消しされているが、縄目タタキ痕が残り、凹面には布目が残る。41は平瓦で、凹面に布目痕、凸面に縄目タタキ痕がみられ、側面がわずかに残り、ヘラケズリで整えられている。2点ともやや硬質に焼成されたものである。これらも29平瓦と同じく、時期の判断は難しいが、広瀬遺跡出土瓦の時期相を鑑みると、鎌倉時代のものであろう。

## 【ピット出土】

SK 1・SK 2以外の遺構内からの出土遺物は、小片がほとんどで、ピット内出土のもので若干図化できた。

42はP 33出土の須恵器杯底部である。回転ナデ調整されている。平安時代前期のものであろう。

43はP 36出土の土師器甕である。口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、体部外面はハケ調整されているが、その下部にはナデ調整がみられる。また内外面とも指頭痕が残る。平安時代前期のものであろう。

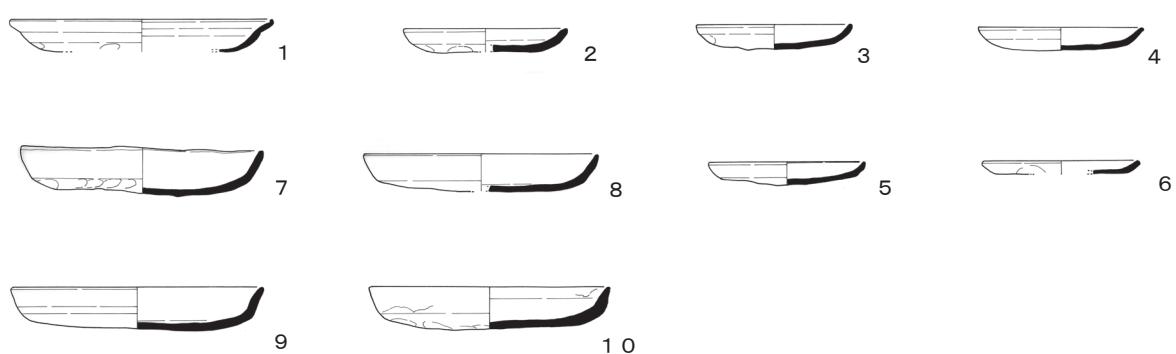
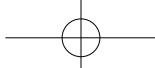
44はP 8出土の土師器皿である。ほぼ完形での字状口縁皿であり、口縁部ヨコナデ、底部内面ナデ、底部外面は指オサエ後ナデ調整されている。器厚はやや薄手で、10世紀中～後半のものと考えられる。

45・46は土錘である。45はP 24出土、46はP 37出土で、46はほぼ完形のものである。2点ともナデ調整により整形されているが、45はヘラ状のもので縦方向にナデられた痕跡が残る。時期については不明である。

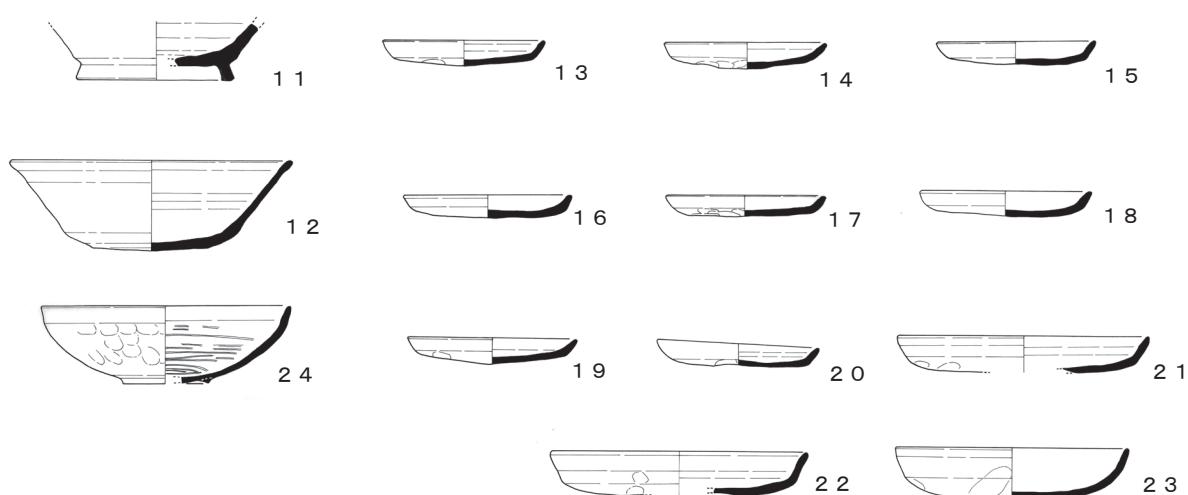
## 【機械掘削土等】

主に盛土等の機械掘削・排土除去中に採集した遺物で、遺存状態が良好なものがあり、当調査地かごく近隣から混入したものと考えられ、図化した。

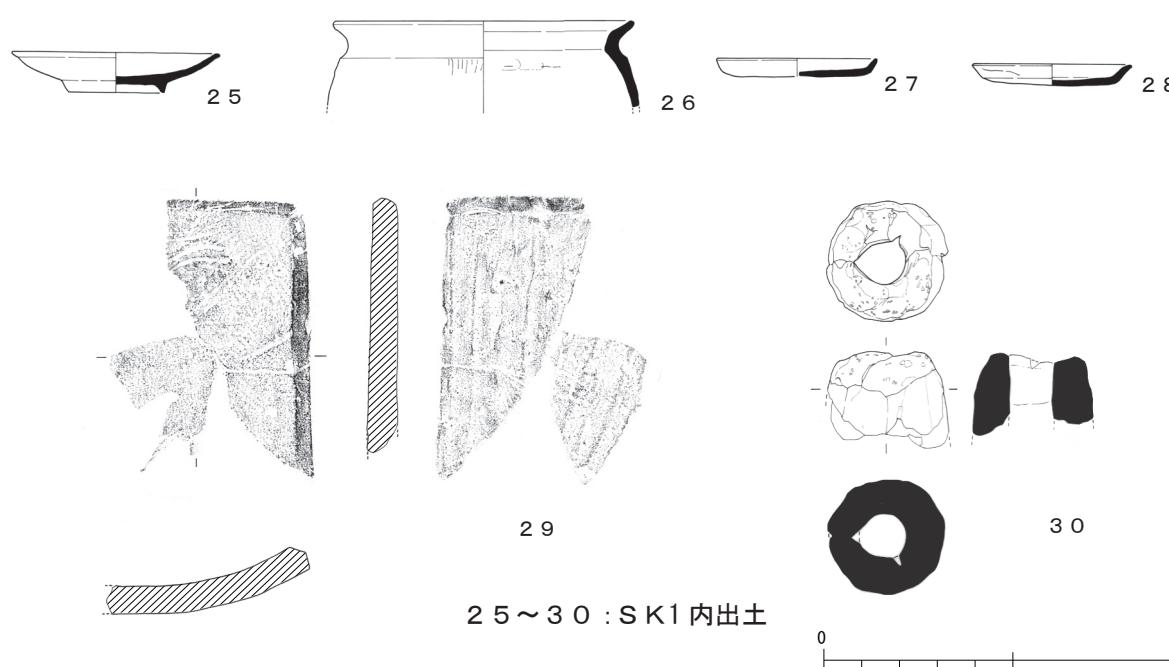
47は緑釉陶器碗である。回転ナデ調整され、硬質に焼成された素地に、濃緑色の釉薬が全面



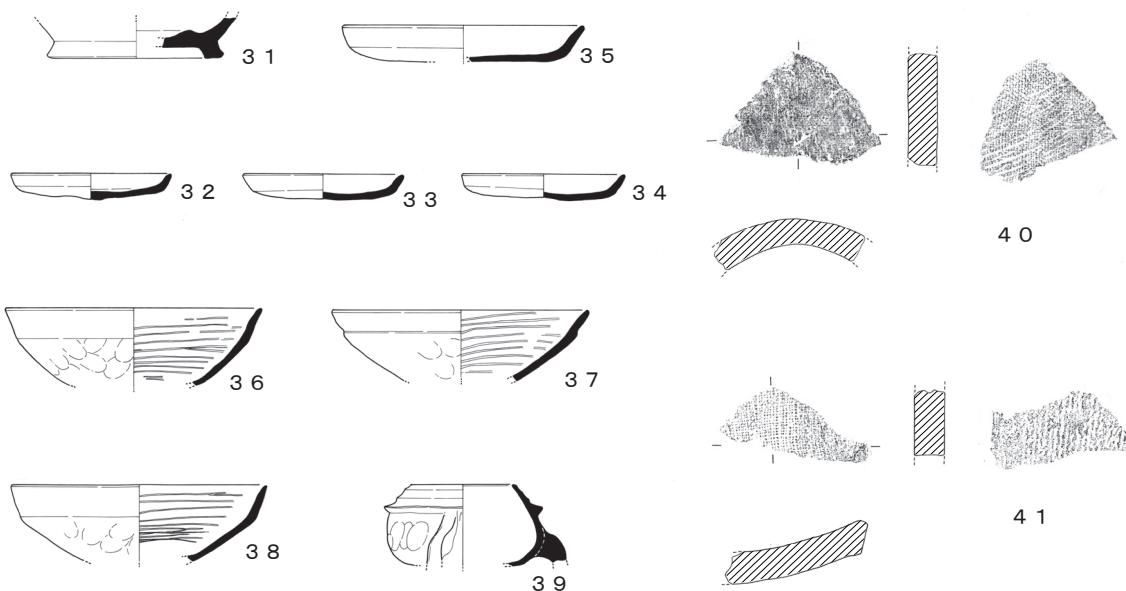
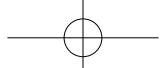
1~10 : SK1 土器群



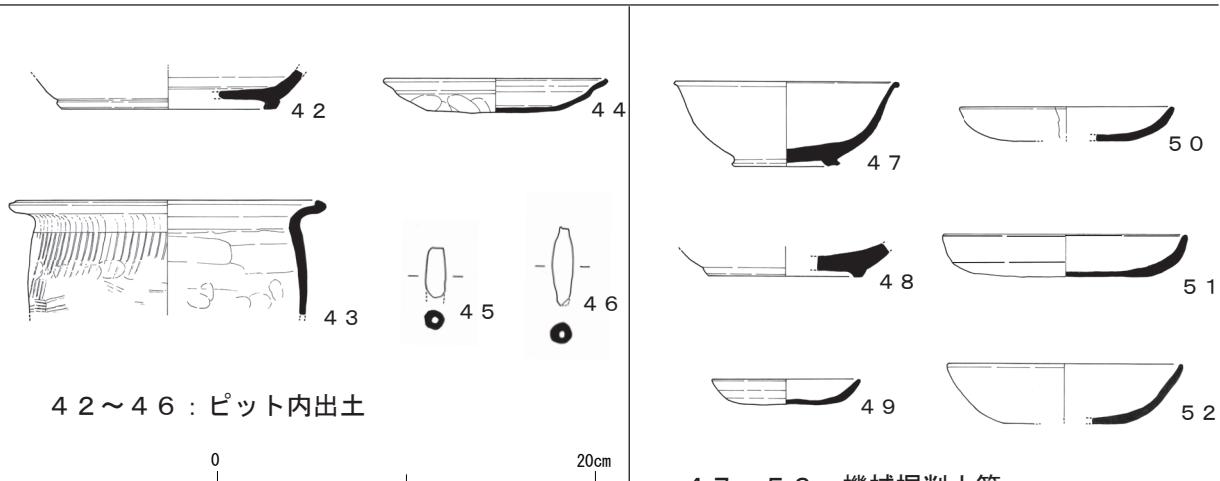
11~24 : SK1 土器群直下埋土



25~30 : SK1 内出土



31~41 : SK 2 内出土



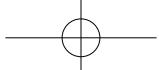
47~52 : 機械掘削土等

第9図 遺物実測図②(1/4)

施釉されている。貼り付け輪高台を有するが、底部外面には回転糸切り痕を残す。平安時代中期のものか。

48は灰釉陶器碗の底部である。回転ナデ調整され、貼り付け輪高台を有し、灰白色の釉薬が施されているが、高台内は施釉されていない。

49~52は土師器皿である。49は小型、50~52は中型のものである。これらは口縁部ヨコナデ、底部はナデ調整されているが、底部外面については、49は未調整で板状の圧痕が残る。また、50は指頭痕が残り、51は磨滅で調整不明である。時期は13世紀中~後半のものと考えられる。



#### 4.まとめ

今回の発掘調査では、ピット、土坑、溝等の遺構を検出することができた。調査範囲の限りもあり、建物跡は確認できなかったが、柱穴と考えられるピットもあり、調査地内に建物跡が存在する可能性は高いと考えられる。

土坑については、SK1・SK2のように深く掘り込まれたものもあったが、その用途・性格は明確でない。SK1・SK2からは多くの遺物が出土し、ごみ廃棄坑の可能性もあるが、SK2については形状から井戸跡の可能性も考えられる。また、SK1については、いくつかの遺構が重複している可能性があり、そこに井戸跡が重複している可能性もある。

溝については、SD6とSD7が直交する方位をもち、例えばスキ溝や区画等何らかの関係性がうかがえる。しかし、他の溝については、その性格・関係性は不明である。

遺構の時期については、先述したように、ピット出土の遺物には平安時代のものが比較的多かった。図化できなかったが、黒色土器（A類椀片が主）や土師器での字状口縁皿など平安時代中期の遺物が多くみられた。しかし、P8出土の字状口縁皿（44）を除いて、ピット内出土遺物は小片ばかりで、かつ少量でもあったので、平安時代の遺物と伴って検出された小片遺物の中には、時期を異にするものが含まれている可能性もある。

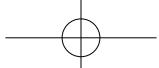
土坑出土の遺物をみると、SK1とSK2においては平安時代から鎌倉時代にかけての遺物が混在して検出され、その下限時期の遺物からすると、SK1・SK2の埋没時期は概ね鎌倉時代（13世紀中～後半）であろうと考えられる。また、SK5・SK6においても鎌倉時代のものと考えられる土師器皿片が検出されている。

溝出土の遺物については、SD3において黒色土器等の平安時代の遺物が出土したほかは、SD4で時期不明の土師器細片が出土した程度で、遺構の時期をとらえ得る資料は少ない。

このように、溝に関しては資料が少ない状況であるが、出土遺物からみて、ここで検出した遺構の時期は、概ね平安時代中期、あるいは鎌倉時代（13世紀中～後半）のものであると考えられる。ピットについては平安時代中期のものが多く、土坑については鎌倉時代のものが多いが、前述したように、平安時代の遺物を検出したピットの中には時期を異にする遺物を含んでいる可能性もある。

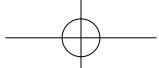
なお、出土遺物には、土師器皿や瓦器椀などの日常雑器ばかりではなく、緑釉陶器・灰釉陶器等の高級陶磁器がある。これらが出土した遺構は、P24・SK1・SK2であり、平安時代と鎌倉時代の遺物が混在して検出された遺構であることから、これら緑釉陶器等は一次的堆積でなく、二次的に混入したものと考えられる。しかし、緑釉陶器等が出土したことは、当地もしくはこの周辺において、これらを所有することができた貴族階級あるいは寺院に関わる施設等の存在が想定される。これが天皇や貴族の遊行、あるいは離宮等に関わるものなのは、さらなる資料の蓄積が必要となるが、今後の検討にあたっての貴重な資料を得たものといえる。

また、今回、時期の特定は難しいが、鞴羽口が検出された。鞴羽口の出土は、この近辺に製鉄や鍛冶関連の工房が存在した可能性を示すものとなり、今後、広瀬遺跡の性格を考える上で1つの視点となる資料を得たといえる。



## 遺物観察表

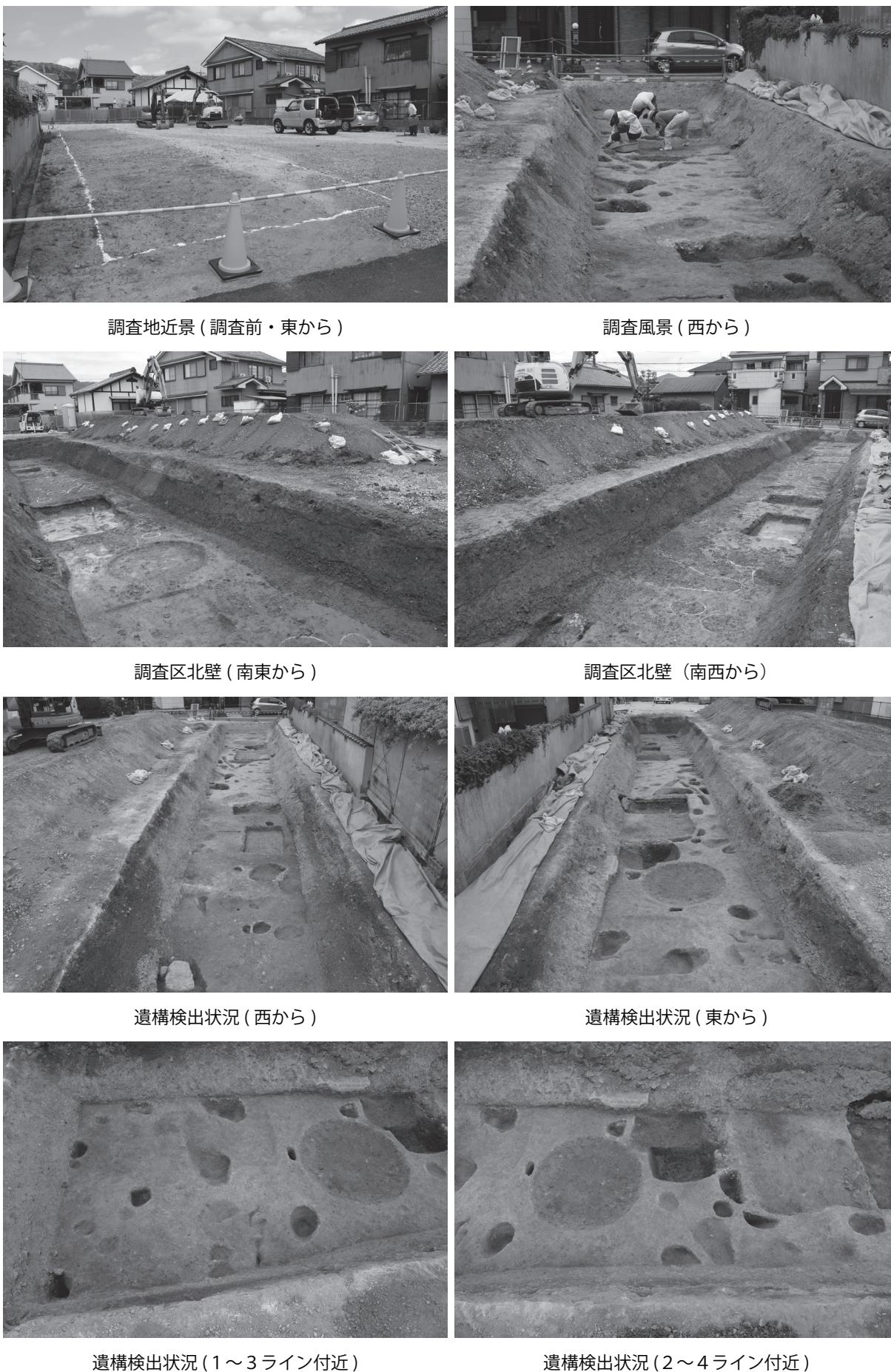
遺物番号	器種	出土地点	残存状況	計測値(cm)	色調	時期	調整	備考
1	土師器皿	SK1土器群	1/9残	口径13.9(復元) 器高1.7(残存高)	内) 外) 10YR8/2灰白、7.5YR8/4浅黄橙 断) 10YR8/2灰白	10C中~後	口縁部: ヨコナデ 底部内面: ナデ 底部外側: 指才サエ後ナデ	・ての字状口縁皿
2	土師器皿	SK1土器群	1/3残	口径8.8(復元) 器高1.25(残存高)	内) 外) 断) 10YR8/4浅黄橙	13C中~後	口縁部: ヨコナデ 底部内面: ナデ 底部外側: 指才サエ後ナデ	
3	土師器皿	SK1土器群	3/4残	口径8.2 器高1.4(残存高)	内) 外) 断) 7.5YR7/4にぶい橙、7.5YR5/2灰褐	13C中~後	口縁部: ヨコナデ 底部内面: ナデ 底部外側: ナデ	
4	土師器皿	SK1土器群	3/4残	口径8.7 器高1.25(残存高)	内) 外) 7.5YR7/4にぶい橙、7.5YR7/3にぶい橙 断) 7.5YR7/3にぶい橙	13C中~後	口縁部: ヨコナデ 底部内面: ナデ 底部外側: ナデ	
5	土師器皿	SK1土器群	ほぼ完形	口径8.2 器高1.3	内) 外) 5YR6/6橙、10YR5/2灰黄褐 断) 7.5YR7/3にぶい橙	13C中~後	口縁部: ヨコナデ 底部内面: ナデ 底部外側: 指才サエ後ナデ	
6	土師器皿	SK1土器群	1/3残	口径8.2(復元) 器高0.7(残存高)	内) 外) 断) 7.5YR8/4浅黄橙	13C中~後	口縁部: ヨコナデ 底部内面: ナデ 底部外側: ナデ(粗い)	
7	土師器皿	SK1土器群	ほぼ完形	口径12.8 器高2.5	内) 外) 7.5YR8/3浅黄橙、7.5YR7/4にぶい橙 断) 7.5YR8/4浅黄橙	13C中~後	口縁部: ヨコナデ 底部内面: ナデ 底部外側: 指才サエ後ナデ	
8	土師器皿	SK1土器群	1/3残	口径12.4(復元) 器高2.0(残存高)	内) 外) 断) 10YR8/3浅黄橙	13C中~後	口縁部: ヨコナデ 底部内面: ナデ 底部外側: 指才サエ後ナデ	
9	土師器皿	SK1土器群	3/5残	口径13.3(復元) 器高2.3(残存高)	内) 外) 断) 7.5YR8/3浅黄橙	13C中~後	口縁部: ヨコナデ 底部内面: ナデ 底部外側: 指才サエ後ナデ	
10	土師器皿	SK1土器群	完形	口径12.7 器高2.3	内) 外) 7.5YR8/3浅黄橙、7.5YR7/4にぶい橙	13C中~後	口縁部: ヨコナデ 底部内面: ナデ 底部外側: 指才サエ後ナデ	
11	須恵器壺か	SK1土器群下埋土	底部1/5残	底径8.4(復元) 器高3.0(残存高)	内) 外) 断) N5/0灰、5Y6/1灰白	平安か	体部・底部内面: 回転ナデ	
12	須恵器椀	SK1土器群下埋土	2/5残	口径14.8(復元) 器高4.8(残存高)	内) 外) 5Y7/1灰白、N7/0灰白[口縁部N5/0灰] 断) N7/0灰白	12C末 ~13C初か	口縁部・体部内外面: 回転ナデ 底部内面: ナデ 底部外側: 回転糸切痕残る	
13	土師器皿	SK1土器群下埋土	5/8残	口径8.4 器高1.4(残存高)	内) 外) 断) 7.5YR8/4浅黄橙	13C中~後	口縁部: ヨコナデ 底部内面: ナデ 底部外側: 指才サエ後ナデ	
14	土師器皿	SK1土器群下埋土	9/10残	口径8.6 器高1.4	内) 外) 断) 10YR7/3にぶい黄橙	13C中~後	口縁部: ヨコナデ 底部内面: ナデ 底部外側: 指才サエ後ナデ	
15	土師器皿	SK1土器群下埋土	3/5残	口径8.4 器高1.3(残存高)	内) 外) 断) 7.5YR8/3浅黄橙	13C中~後	口縁部: ヨコナデ 底部内面: ナデ 底部外側: 指才サエ後ナデ	
16	土師器皿	SK1土器群下埋土	3/4残	口径9.0 器高1.2(残存高)	内) 外) 断) 10YR8/3浅黄橙	13C中~後	口縁部: ヨコナデ 底部内面: ナデ 底部外側: 指才サエ後ナデ	
17	土師器皿	SK1土器群下埋土	1/2強残	口径8.4 器高1.2(残存高)	内) 外) 断) 10YR7/3にぶい黄橙	13C中~後	口縁部: ヨコナデ 底部内面: ナデ 底部外側: 指才サエ後ナデ	
18	土師器皿	SK1土器群下埋土	9/10強残	口径9.1 器高1.4	内) 外) 断) 10YR8/3浅黄橙	13C中~後	口縁部: ヨコナデ 底部内面: ナデ 底部外側: 指才サエ後ナデ	
19	土師器皿	SK1土器群下埋土	3/10残	口径9.0(復元) 器高1.4(残存高)	内) 外) 断) 10YR8/4浅黄橙	13C中~後	口縁部: ヨコナデ 底部内面: ナデ 底部外側: 指才サエ後ナデ	
20	土師器皿	SK1土器群下埋土	9/10残	口径8.6 器高1.2	内) 外) 断) 7.5YR8/4浅黄橙	13C中~後	口縁部: ヨコナデ 底部内面: ナデ 底部外側: 指才サエ後ナデ	
21	土師器皿	SK1土器群下埋土	1/2残	口径13.2(復元) 器高1.9(残存高)	内) 外) 7.5YR8/2灰白、7.5YR8/4浅黄橙 断) 7.5YR8/4浅黄橙	13C中~後	口縁部: ヨコナデ 底部内面: ナデ 底部外側: 指才サエ後ナデ	
22	土師器皿	SK1土器群下埋土	3/10残	口径13.5(復元) 器高2.3(残存高)	内) 外) 断) 7.5YR8/4浅黄橙	13C中~後	口縁部: ヨコナデ 底部内面: ナデ 底部外側: 指才サエ後ナデ	
23	土師器皿	SK1土器群下埋土	ほぼ完形	口径12.4 器高2.7	内) 7.5YR7/4にぶい橙 外) 7.5YR7/4にぶい橙、10YR8/2灰白、 7.5YR6/2灰褐 断) 7.5YR7/4にぶい橙	13C中~後	口縁部: ヨコナデ 底部内面: ナデ 底部外側: 指才サエ後ナデ	
24	瓦器椀	SK1土器群下埋土	1/4残	口径13.3(復元) 器高4.1(残存高)	内) N5/0灰、N8/0灰白 外) N5/0灰 断) N8/0灰白	13C中~後	口縁部: ヨコナデ 体部内面: ヘラミガキ(やや粗) 体部外側: 指才サエ	・楠葉型
25	綠釉陶器皿	SK1	1/6残	口径11.1(復元) 器高2.1(残存高)	素地: N6/0灰 釉薬: 10Y5/2オリーブ灰、7.5Y5/3灰オリーブ (底部外側5GY5/1オリーブ灰)	平安中期	底部外側: 回転糸切痕残る 他: 回転ナデ	・素地は硬質 ・全面施釉
26	土師器甕	SK1(底面)	上部1/8残	口径15.8(復元) 器高4.6(残存高)	内) 10YR7/2にぶい黄橙、10YR8/3浅黄橙、 10YR5/4にぶい黄褐 外) 10YR7/2にぶい黄橙、10YR8/2灰白 断) 7.5YR7/6橙、10YR8/4浅黄橙	平安後期か	口縁部: ヨコナデ 体部内外面: ナデ	



遺物番号	器種	出土地点	残存状況	計測値(cm)	色調	時期	調整	備考
27	土師器皿	SK1	2/5残	高台径8.5(復元) 器高1.0(残存高)	内)外)断)10YR7/3にぶい黄橙	13C中~後	口縁部:ヨコナデ 底部内面:ナデ 底部外面:指才サエ後ナデ	
28	土師器皿	SK1	3/5残	口径8.4 器高1.2(残存高)	内)外)断)7.5YR7/2明褐灰、7.5YR5/1褐灰	13C後 ~14C初か	口縁部:ヨコナデ 底部内面:ナデ 底部外面:ナデ	
29	平瓦	SK1	—	長さ14.2(残存長) 幅11.0(残存幅) 厚さ1.5	凹面)凸面)2.5Y4/1黄灰 断)7.5YR7/3にぶい橙	鎌倉か	凹面:布目痕 凸面:ヘラナデ 側面:ヘラケズリ 上端面:ヘラケズリ	
30	輪羽口	SK1	—	長さ5.1(残存長) 幅6.2(残存部) 孔径2.3	表面)5Y6/1灰 孔内面)10YR7/4にぶい黄橙、5YR7/4にぶい橙 断)5Y4/1灰、10YR7/4にぶい黄橙	不明	被熱、磨滅のため、調整不明	
31	灰釉陶器碗	SK2	上部1/8残	高台径9.0(復元) 器高2.3(残存高)	素地)2.5Y7/1灰白 釉薬)7.5Y5/2灰オリーブ	平安	内外面:回転ナデ	・全面施釉 ・体部と高台との接合部に水色 (10BG7/1明青 灰)の釉薬厚く残る
32	土師器皿	SK2	4/5残	口径8.6 器高1.4(残存高)	内)外)断)10YR8/4浅黄橙	13C中~後	口縁部:ヨコナデ 底部内面:ナデ 底部外面:指才サエ後ナデ	
33	土師器皿	SK2	9/10強残	口径8.6 器高1.4	内)外)断)10YR8/4浅黄橙	13C中~後	口縁部:ヨコナデ 底部内面:ナデ 底部外面:指才サエ後ナデ	
34	土師器皿	SK2	3/4残	口径8.6 器高1.4	内)外)断)10YR8/4浅黄橙	13C中~後	口縁部:ヨコナデ 底部内面:ナデ 底部外面:指才サエ後ナデ	
35	土師器皿	SK2	1/2残	口径12.8(復元) 器高2.0(残存高)	内)外)断)10YR8/3浅黄橙	13C中~後	口縁部:ヨコナデ 底部内面:ナデ 底部外面:指才サエ後ナデ	
36	瓦器碗	SK2	1/3残	口径13.6(復元) 器高4.1(残存高)	内)N4/0灰 外)N4/0灰、N8/0灰白 断)N8/0灰白	13C中~後	口縁部:ヨコナデ 体部内面:ヘラミガキ(やや粗) 体部外面:指才サエ	・楠葉型
37	瓦器碗	SK2	1/6残	口径13.6(復元) 器高3.7(残存高)	内)N8/0灰白 外)5Y7/1灰白 断)N8/0灰白	13C中~後	口縁部:ヨコナデ 体部内面:ヘラミガキ(やや粗) 体部外面:指才サエ	・楠葉型
38	瓦器碗	SK2	1/4残	口径13.6(復元) 器高4.0(残存高)	内)外)N4/0灰 断)N8/0灰白	13C中~後	口縁部:ヨコナデ 体部内面:ヘラミガキ(やや粗) 体部外面:指才サエ	・楠葉型
39	瓦器 三足羽釜	SK2	1/4残	口径5.2(復元) 器高4.3(残存高)	内)2.5Y6/1黄灰 外)2.5Y6/1黄灰、2.5Y8/1灰白 断)N8/1灰白	13Cか	口縁部:ヨコナデ 体部内面:ナデ 体部外面:ナデ(指頭痕残る)	・ミニチュア土器
40	丸瓦	SK2	—	長さ6.2(残存長) 幅8.8(残存幅) 厚さ1.4	凹面)凸面)2.5Y8/1灰白 断)2.5Y8/1灰白、2.5Y6/1黄灰(中央)	鎌倉か	凹面:布目痕(糸切痕) 凸面:ナデ消し(繩目残る)	
41	平瓦	SK2	—	長さ6.2(残存長) 幅8.1(残存幅) 厚さ1.6	凹面)凸面)2.5Y6/1黄灰 断)2.5Y5/1黄灰	鎌倉か	凹面:布目痕 凸面:繩目タタキ 側面:ヘラケズリ	
42	須恵器杯	P33	底部1/10残	高台径10.0(復元) 器高2.2(残存高)	内)N4/0灰 外)N4/0灰~N5/0灰 断)5YR5/2灰褐	平安前期	体部・底部内面:回転ナデ	
43	土師器壺	P36	上部1/4残	口径15.8(復元) 器高6.1(残存高)	外)10YR7/3にぶい黄橙、5YR7/4にぶい橙 内)7.5YR4/2灰褐、7.5YR6/2灰褐 断)7.5YR3/2黒褐、5YR7/4にぶい橙	平安前期	口縁部:ヨコナデ 体部内面:ナデ 体部外面:ハケ調整後一部ナデ	
44	土師器皿	P8	ほぼ完形	口径11.9 器高1.8	内)外)断)5YR7/6橙、10YR7/3にぶい黄橙	10C中~後	口縁部:ヨコナデ 底部内面:ナデ 底部外面:指才サエ後ナデ	・ての字状口縁皿
45	土錘	P24	—	長さ2.65(残存長) 径1.1	表面)断)10YR7/4にぶい黄橙	不明	外面:ナデ (継方向へラ状のものでのナデ)	
46	土錘	P37	端部一部欠損	長さ4.15(残存長) 径1.15	表面:図上部)7.5YR5/1褐灰 表面:図下部)10YR6/4にぶい黄橙	不明	外面:ナデ	
47	綠釉陶器碗	機械掘削	1/2弱残	口径11.7(復元) 器高4.5(残存高)	素地)N5/0灰 釉薬)10Y4/2オリーブ灰	平安中期	底部外面:回転糸切痕残る 他:回転ナデ	・素地は硬質 ・全面施釉
48	灰釉陶器碗	機械掘削	底部1/4残	高台径8.2(復元) 器高1.8(残存高)	素地)7.5Y8/1灰白 釉薬)5Y7/1灰白	平安	内外面:回転ナデ	・高台内は施釉されず
49	土師器皿	機械掘削	1/2残	口径7.8(復元) 器高1.4(残存高)	内)外)断)7.5YR8/3浅黄橙	13C中~後	口縁部:ヨコナデ 底部内面:ナデ 底部外面:未調整(板状の圧痕残る)	
50	土師器皿	機械掘削	1/4残	口径11.3(復元) 器高1.8(残存高)	内)外)断)7.5YR8/4浅黄橙	13C中~後	口縁部:ヨコナデ 底部内面:ナデ 底部外面:指才サエ後ナデ	
51	土師器皿	機械掘削	4/5残	口径12.8 器高2.3(残存高)	内)外)断)7.5YR7/6橙 断)7.5YR8/2灰白	13C中~後	口縁部:ヨコナデ 底部内面:ナデ 底部外面:磨耗により調整不明	
52	土師器皿	機械掘削	1/4残	口径12.5(復元) 器高3.2(残存高)	内)外)断)5YR5/2灰褐、5YR7/3にぶい橙	13C中~後	口縁部:ヨコナデ 底部内面:ナデ 底部外面:ナデ	



図版1 調査地近景・調査区北壁・遺構検出状況



調査地近景(調査前・東から)

調査風景(西から)

調査区北壁(南東から)

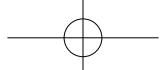
調査区北壁(南西から)

遺構検出状況(西から)

遺構検出状況(東から)

遺構検出状況(1～3ライン付近)

遺構検出状況(2～4ライン付近)



遺構検出状況(4~6 ライン付近)



遺構検出状況(6~8 ライン付近)



遺構検出状況(3~10 ライン付近)



遺構検出状況(10~12 ライン付近)



遺構検出状況(S K 1 付近・南から)



S K 1 近景(西から)



S K 1 近景(北東から)



S K 1 土器群検出状況(東から)

図版2  
遺構検出状況・  
S K 1 土器群



図版3

遺構検出状況・P8土師器出土状況



SK 1 完掘状況(北から)



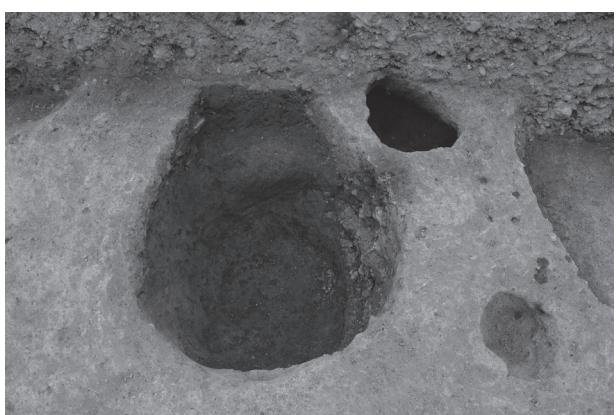
遺構検出状況(SD 4・SK 2付近・西から)



SK 2近景(西から)



SK 4・P72近景(南から)



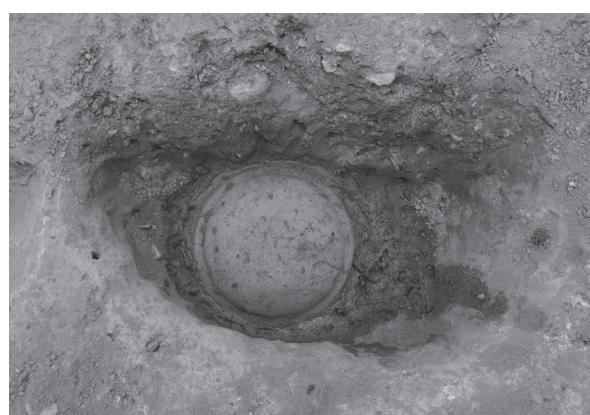
SK 5近景(南から)



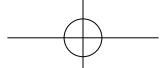
P37近景(西から)



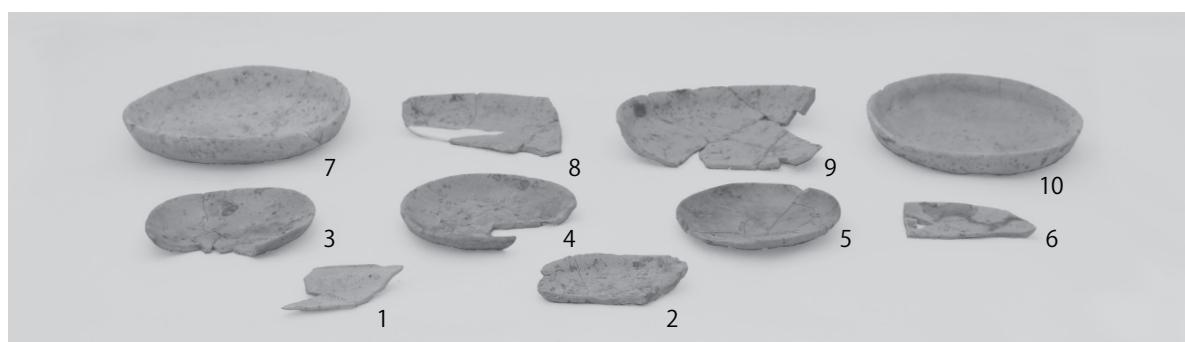
P26近景(東から)



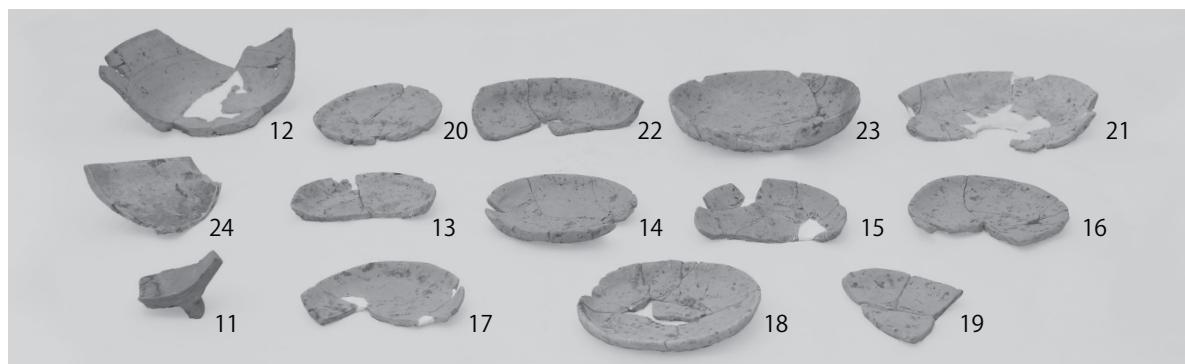
P8内土師器皿検出状況



図版  
4  
出土  
遺物



SK 1 土器群 (1~10)



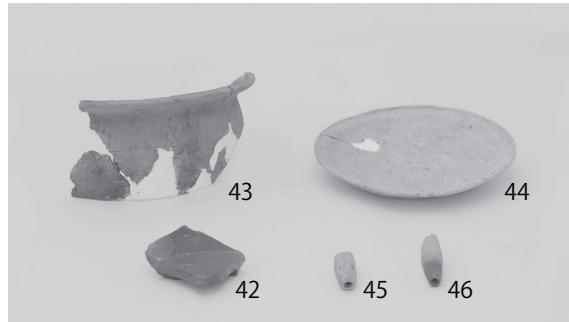
SK 1 土器群直下埋土 (11~24)



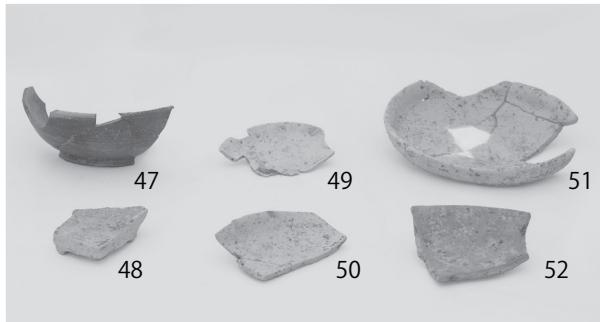
SK 1 内出土 (25~30)



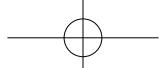
SK 2 内出土 (31~41)



ピット内出土 (42~46)



機械掘削土等 (47~52)

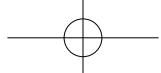


## 報告書抄録

ふりがな	しまもとちょうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	島本町文化財調査報告書
副書名	広瀬遺跡発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	島本町文化財調査報告書
シリーズ番号	第44集
編著者名	賀納 章雄・坂根 瞬
編集機関	島本町教育委員会事務局 教育こども部 生涯学習課
所在地	〒618-8570 大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号 Tel075-961-5151
発行年月日	令和5年2月28日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°' "	°' "			
ひろせいせき	しまもとちょうひろせ							
広瀬遺跡 (HS19-1 善法寺)	島本町広瀬三丁目365番	27301	14	34° 34' 03"	135° 40' 20"	20190515 ~20190606	98.6	宅地造成工事に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
広瀬遺跡	集落	平安・中世	ピット・土坑・溝	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・綠釉陶器・灰釉陶器・瓦・土錘・輔羽口	なし



**島本町文化財調査報告書 第44集**

発行	島本町教育委員会 〒 618-8570 大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号 TEL 075-961-5151
発行日	令和5年2月28日
印 刷	三星商事印刷株式会社 〒 604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町300 TEL 075-256-0961

